

引退した電車部材 を再利用した バックパック

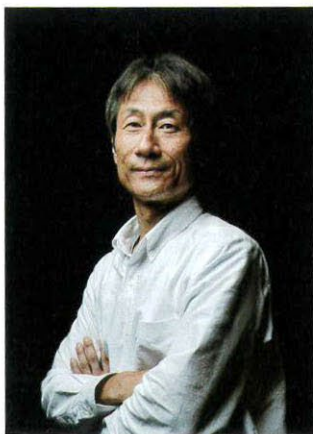
サンワード

滋賀県野洲市に縫製工場を持つ、鞆・袋物の企画製造販売を手掛けるサンワード（大阪市天王寺区）は、自社ブランドで廃材を活用したアップサイクルに積極的に取り組んでいる。今年8月には神戸市交通局と連携し、地下鉄車両の廃材を使用したバックパック（子供用・大人用）を発表。地球環境への配慮だけでなく、機能性やデザイン性も追求した商品を生み出している。鉄道ファンにはたまらない逸品だ。

（✍️ 戸田由馨）

■規格外の消防用ホースを活用

同社の事業の9割は他社ブランド商品のOEM生産。残り1割が、SDGsに特化した自社企画品の製造だ。遡ること11年前の2011年、製造規格外となり廃棄予定だった消防用ホースをアップサイクルし、鞆を製作したのが始まりだ。12年には



オンラインで取材に応じた
池田智幸社長

滋賀県野洲市に自社工場を設立。SDGs向けの自社商品はここで製造されている。

近年のSDGsへの関心の高まりから、これらがにわかに注目されるようになった。「最近になってメディアで取り上げられる機会が増えました。障がいを持つ方々との取り組みも2013年から取り組んでいます。同じように、近年注目されるようになってきました」と池田智幸社長。同社ではこのほかにも、帝

人と共同開発した使用済みPETボトルの再生繊維「ECOPET TWILL LINE」を展開している。

■廃車再生プロジェクトに参加

SDGs企画の第1弾では消防用ホースを使用。厳しい製造規格により、わずかな誤差や傷で規格外になり、結果として、大量の消防用ホースが産業廃棄物として捨てられるという。同社は、耐久性、耐水性に優れる同素材を活用し、実用的で、赤や青、黄色といった色鮮やかな鞆にアップサイクルした。

第2弾は大阪メトロと連携し、引退車両の部品を活用してバックパックを製作。30～40年で引退を迎えるという地下鉄車両の部品を活用し、商品化するという、大阪メトロの「廃車再生プロジェクト」に参加。廃棄予定の吊り輪と、電車の連結部分に使われている貫通幌かんつぼろを活用しバッグを製作。今年3月に「RAU-RAU-G HAITETSU」として発表した。



今回引退した神戸市交通局「西神・山手線1000形/12号車」は1977年に営業運転を開始。当初から冷房装置を搭載しており、先行性が評価され鉄道友の会による「ローレル賞」を受賞した



神戸市交通局の引退車両部材を活用したバックパック。
手前が子供用、奥が大人用

■車両の顔をそのまま再現

ここで得た知見から、廃車両の部材を活用したアップサイクルを進めている。「定期的に廃車となる車両が出るのが分かりました。全国の鉄道会社も同じような課題を抱えられていると思い色々とお声がけをさせていただきました」（池田社長）。その中で神戸市交通局が手を挙げ、一緒にタッグを組むことになった。完成した商品は、先月8月30日までクラウドファンディング「Makuake」に出品されたRAU-RAU-G HAITETSUの第2弾品だ。Makuake限定品とのことで、一般販売も予定されているがデザインは異なるという。

大人用バックパックは「海岸線5000形」のブルーと、「西神・山手線1000形」のグリーンをイメージした青と緑



人を支えてきたつり革は、今度は鞆の持ち手に生まれ変わった

の2色展開。幼児から小学生高学年までを対象にした子供用は、各車両の顔がデザインポイントだ。いずれも機能性と意匠性に優れたアイデアが随所に散りばめられている。これについて、支援者からは「引退した電車の部材を有効活用しているところに共感しました」「電車の見た目のデザインに惹かれました」「地下鉄ファンの家族にプレゼントします」「1000形電車の形見として使います。素敵な商品ありがとうございます」といったコメントが寄せられている。

子供用のデザインを担当した富田真理子さんは、「車両の顔をそのまま再現しました。持ち手となる吊り輪を収納できるポケットをバックパック内に設け、使わないときは収納できます。収納したときの吊り輪を見せたかったので



つり革サイズより大きい横18cmのファスナーポケットで、つり革の出し入れがスムーズ。窓部分は透明ビニールを採用。外から中のつり革が見られるのがポイント



↓解体・洗浄後



バックパックの底部に使う貫通幌は池田社長が1つひとつ丁寧に洗浄している



スタッフが1つひとつ解体し、洗浄・漂白したつり革は、研磨・乾燥され、白くきれいなつり革によみがえる

窓部分は透明のビニール（塩化ビニル）にしました。物を入れてしまうと見えなくなりますが、ちょっとした遊び心を楽しんでいただければ」と語る。バックパックの底部に

は、丈夫で耐水性のある貫通幌を使用。貫通幌の素材は3層構成で、両面にPVC、中間層に織物が使われている。吊り革も貫通幌と同様、PVCの間に織物がサンドされている。

「中間に織物が挟まれていることによって強度が保たれている」。吊り輪の素材はPC（ポリカーボネート）。なお車両によってこれらの素材は異なる。

製品化する上で苦労した点は、「鉄道好きの方々に気に入ってもらうため、企画をはじめ、形状に適した素材選びに時間を要しました。貫通幌を洗浄するのが一番大変ですね」と池田社長。洗浄は社長自身が担当。「基本、土日ずっと洗っています。これからもだいが洗わないかん」と笑う。今秋の10月には、車両内の椅子の生地を使用したポーチやトートバックといった小物系商品も登場予定だ。

神戸電鉄や神戸新交通ともプロジェクトが進行中。「廃車両からのアップサイクルの裾野を広げていこうと動いている」。ボディバッグやサコッシュ（※）として製品化予定で、クラウドファンディングでの募集を計画している。

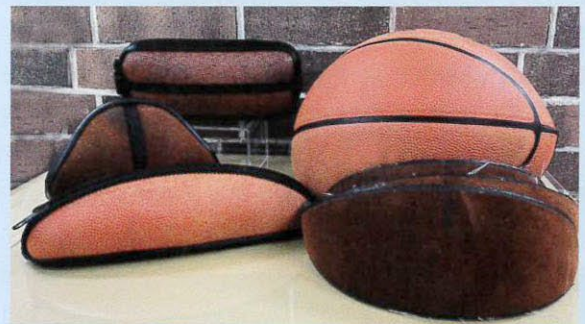
※フランス語で鞆の意味。最低限の貴重品を携帯できる、軽量でコンパクトサイズの肩から掛けられるバッグ

●学校の廃棄体育用品もアップサイクル

SDGs推進に積極的な大阪・堺市との取り組みも進んでいる。市内の小中学校で使用され、体育館の奥底で眠る体操マットやボールを回収し、ポーチやバッグ、タブレットケースなどに商品化予定だ。

「体操マットは様々な素材が混じり合っているため産業廃棄物として処理しづらい現状があります。鞆の素材に使われる帆布は中厚の8号クラスのものが多いですが、体操マットは極厚手の4号クラスの帆布が使用されており、丈夫な素材です。9月から、SDGs商品を集めたクラウドファンディングで、アップサイクル品のプロジェクト応援者を募集します。売り上げの一部は、学校に物品

（ボール）で寄付します。学校は予算がごくわずかでボール1個購入するのも大変な状況と聞きます。同じ課題を抱えられているところは多くあると思いますので、活動を全国に



バスケットボールをアップサイクルしたポーチやベンケース（左）

拡げていきたいですね」と池田社長。

体操マットを使用した生地には転写プリントを施している。「生地に消毒もしていますが、汚れが落とさきれない部分があるため印刷を施しています」。綿生地への転写プリントについては、「転写プリントはポリエステルに転写するのが一般的ですが、綿素材に転写できるように装置を改造しています。写真の転写印刷も可能です」（池田社長）とのこと。

同商品のプロジェクトは10月31日まで実施している。



SAKAI SDGs
クラファン

